

作文指導のトータル化

— 「10分間作文」「読み書き関連・連動作文」「作文単元」の連携 —

長崎大学 安河内義己

1 作文指導のトータル化とは

安河内は『教育科学国語教育』7月号臨時増刊号(1996No528)で、「作文指導研究の到達点と改革課題」について、「自己表現としての作文指導のトータル化」が「改革課題」だと提案した。「トータル化」とは「システム化」されたものを、作文教室レベルで、連携・関連・総合することである。

2 トータル化の前提として — 作文指導のシステム化

①作文指導過程のシステム化 ②文章構成法のシステム化 ③作文指導コースのシステム化
④作文力のシステム化 ⑤作文指導計画のシステム化 ⑥作文指導方法のシステム化 ⑦作文の文種のシステム化 ⑧作文の題材設定のシステム化 など。

3 トータル化の目的として — 自己表現としての作文

「自己表現としての作文」は、「『作文＝ことばを綴って文を作ること、それを作文だと考えたことが、そもそも国語教室の間違いだっただ』、『これからは、作文ではなく、作自(己)としよう。そうすることによって、私たちは、<書くことがない>という子どものいちばんの悩みを払拭することができる。』」というところから発想されている。したがって、書く場は、単に文を綴ることができればいいというだけの場ではなく、綴るに値するもの・ことを自己の内につくり上げるという意味で、自己づくりの場なのである。

次のような指導過程をたどり、安河内はこれを取材カード・モザイク方式と称している。

- | | |
|------------------------------|--|
| ①書く場の設定＝自己づくりの場の設定 | ④モザイク活動＝自己の確定と構成活動 |
| ②取材カードづくり＝自己づくり | ⑤作品の値踏み活動＝自己の値踏み活動 |
| ③評価と再取材活動＝自己の評価と
再自己づくり活動 | (『国語と教育』19号135p, 1994 長崎大学
国語国文学会) |

4 トータル化の事例とその効用

- ・「読み・書き連動作文」が「10分間作文」と「作文単元」を繋ぐ。
- ・「十分間作文」が「作文単元」を支える。
- ・これらによって作文する活動の量が確保され、活動の質のレベルアップが容易に図られる。